

両親、兄弟は戦争が終わったというのに一年以上過ぎてても帰って来ないし、全然便りも無いので、もう戦死をしたと思って時々陰膳を供えながら、万が一にも生きて帰って来ることを祈っていたのだと、両親に聞かされた。

戦争は二度と起こしてはいけない。起こさせない。大勢の尊い、若人の命を奪い取るのである。

「特幹譜」

その純粹なる魂の軌跡

東京都 平野康夫

国家が総力を結集して一つの目的に向かっている時、この国に所属する男も女もひとしくこれに協力するか、或いは献身する義務があるのは至極当然の事である。

それが戦争であり、他国をやっつけるという目標で

あるならば、男は、欣喜雀躍として武器を執る。聖戦か、侵略かなど考える余裕がある訳はない。これが自然である。そして最も手っ取り早い参加の形が「志願」である。

「わが胸の燃ゆる思いにくらぶれば 煙はうすし桜じま山」幕末の勤皇の僧月照は、こう詠んで錦江湾に入水した。地下に巨大なマグマを貯えた桜島は、時に噴煙をあげて爆発する。元来「志願」という燃ゆる思いは参加行動の典型であって、行動は勇、思考は純、ややオッチョコチョイの傾向を伴っている。

私たちはこれに呼応した。

情報は昭和十八（一九四三）年十二月十五日朝刊の新聞報道から知り得た。

—毎日新聞紙面から抜粋—

陸軍に「特別幹候制」生まる

青少年から優秀下士

入隊後一年半で伍長に

苛烈な戦局の要請と青少年の愛国の情熱に應え、陸軍では特別幹部候補生制度を新設、決戦場の中堅戦士となるべき優秀下士官を大量補充することになり、同十五日付官報で関係勅令、省令及び召集告示が公布された。

この制度は少年兵よりも更に学力の高い中学三年程度の者から選抜して特別幹部候補生に採用し、軍隊または学校で一年六カ月教育したのち、現役下士官とする。

志願資格は採用の年の三月三十一日に、満十五歳以上二十歳未満で、別に学歴を問わず、独学でも夜学でも中等学校三年程度の学力のある者なら志願できる。

特別幹部候補生に採用された者は、入隊後直ちに一等兵を命ぜられ、六カ月後に上等兵、更に六カ月で兵長に進級、採用後一年半で現役伍長に任ぜられるが、中等学校卒業者、または特殊の技能を修得した者で技能特に優秀な者は最初から軍曹に任ぜられる。

特別幹部候補生から下士官になった者は採用の日か

ら二年間は現役で、その後は予備役となるが、本人の希望により引続き現役に服する事ができる。また現役将校を希望する者は、特別幹部候補生の間、または下士官になった後でも陸軍予科士官学校の入学試験を受けることができるし、また一定の階級に進んでから少尉候補者の試験を受けて将校となる途が開かれている。採用する兵種は飛行兵、船舶兵、通信兵、兵技兵、航技兵であるが、来年四月、さしあたり採用するのは、飛行兵と船舶兵の二兵種となっている。

飛行兵の中には操縦、通信、整備の分科があり、船舶兵の中には、船舶工兵、通信、整備、特殊艇要員の分科があるが、現戦局では空と海の要員は最も重視されるところであり奮って多数志願することを希望している。

これより少し前、昭和十八年六月、総理兼陸相東條大將は、航空を超重点とする軍備再構築を指令した。南太平洋戦域の苦戦と、航空の戦略価値を認識した結果である。

一 国の首相で、しかも陸軍大臣が、戦争開始一年七カ月も経って、こんな事を言っているのは驚きだが、当時の現状はこんな具合だった。

陸軍の保有飛行機は、可動機六千、練習機一千、昭和十八年末までの生産予定のうち陸軍への割当ては三千機であった。一方操縦者の数は、錬度甲・乙・丙全部でおよそ六千五百人であった。

昭和二十年初頭までの飛行機生産予想は二万二千機でこれを陸海軍に割り振るのである。

問題があった。

まずガソリン。操縦者養成のための教員と施設。そして養成員の資質問題など。

現状において陸軍の操縦者養成は「航空士官学校」「少年飛行兵」「教育飛行隊及び錬成隊」があり、更にこの年十月第一期生が入校した「特別操縦見習士官」制度がある。この特別操縦見習士官は大学・高専・師範校の在籍、卒業生から募集したところ、定員の約六倍の応募があり関係者を喜ばせた。この制度は見習士

官として入隊し一年間の訓練を経て少尉に任官するというもので、即戦力として高く評価された。海軍では類似の「飛行科予備学生」というのがあった。

陸軍の養成人員ひっくるめてもまだ足りない。何しろ大消耗戦に入って久しいから、前線からは矢の催促であり、何としても即戦力が欲しい。民間の航空機乗員養成機関から引き抜いたりするがまだ足りない。これらの不足分を補うために海軍予科練の向こうを張って陸軍特別幹部候補生の誕生をみたのである。

当時は男子校だった中学在校生のうち、四、五年生が約十五万人ほどいる。それに加え卒業した者や独学者の中から、概ね昭和二十年二月までに養成すべき者を、操縦四千人、通信五千人、整備五千人、船舶四千人とはじいた。

昭和十九年に入ると、その推進のため朝日新聞社主催で「進め！ 陸軍特別幹部候補生（海軍立体機動演習見学会）」が企画され、各中等学校から校長、生徒代表一人が参加、広島宇品港を中心に演習を見学し

た。参加人員は二千六百人である。帰校後参加した生徒を中心に報告会が行われ、多数の志願者があったという。

路線は敷かれた。

あの時期、つまり負けいくさで坂道をころげ落ちるような焦燥の中で日本人は一体何を考えたのか。詳しい本当の戦況は隠されているが、その部分を敏感に反応するのは人間の本能といっている。雨の神宮外苑で数万人に及ぶ学徒壮行会が行われているが、参加者も見学者も写真で見る限りその表情は暗い。

その暗さの延長線上において一群の軍国少年が「特幹」の志願票を手にしたといえるのではないか。

こうして我々は昭和十九年四月五日、水戸市郊外の陸軍航空通信学校長岡教育隊の営門をくぐった。いが栗頭に学生服、手に手にトランクを下げた少年達の表情は奇妙な明るさと期待感に溢れていた。厳しい悲惨さを伴う戦争の実態を知らない我々の、軍人として残された時間はこのあと一年五カ月しか無かったが、は

ち切れんばかりの若い力で訓練と学科に励んでいる。やり場のないはげ口を、ともかくも軍という国家そのものの集団の中に身を置くという安堵感がある。私には同期生や上官たちの人柄の観察に大いに興味をもって眺める余裕があり、各人の発散する温度差や人間性に新たな目を開かされたものである。

同期生の中でも年齢差がある。学歴差もある。彼らはおしなべて優秀であった。入試の採用率は五倍とも六倍とも言われていたから、やはり採用側からみれば「とっておき」の第一期生だったのだろう。

「あるとき、正直言っただ心が痛んだよ。何しろ一番早い仕上がり兵は、最年少十五歳で戦場に立つんだからな、俺の息子も特幹だったがね、陸士を志望しとったんだが、あと三年も待ってられない、と言ってね」

戦後になって聞かされた老士官の呟きである。

昭和十九年十月一日、上等兵に進級した。校外での通信演習等も多くなり、我々の仕上がりは昭和十九年

十二月二十九日であった。

学校長・田中友道少将から卒業証書が授けられ、第一線配属を待つ身となった。そして早くも転属していった者もいる中で、年明け早々から戦死者も出始めた。

特攻隊員もいる。

第四十五振武隊員を拜命した第十中隊の陸軍航空総監賞受賞者坂恒夫伍長は、特攻訓練中、松戸飛行場において殉職した。後日操縦者の中田少尉の胸に抱かれた遺骨が、沖繩西方海域に突入散華している。第十中隊は機上無線要員の教育中隊で、中隊出身者の中から十二人の戦死者（特攻を含む）を出した。

元来、航空通信という兵科は飛行機に乗って電鍵を握り「トトツ」をやるとばかり思っていたが大違いだった。適性検査によって選抜されたエリートであり、全体の一割程度しか採用されない。大部分は地上において無線機を動かし空中と交信したり、暗号や情報をとったり、無線機の整備に服務した。

坂伍長を書いたので特攻に触れてみたい。これは戦争体験者にとっては避けて通れない命題なのである。

坂伍長が我々の教育隊からただ一人特攻隊員に指名されたのには、次のような学校幹部の思いがあった。

「荣誉ある最初の特攻隊員を拜命する者は、当校の最優秀候補生でなければならない」

もう一つの光景をつづる。海軍特攻の創設者となった大西瀧治郎中将は、比島マバラカット基地で特攻を発令し、二〇一空の玉井中佐に人選を命じたとき、指揮官についてこのように発言したと伝えられている。

「我々の母校、海軍兵学校出身以外の者を、死に赴かせる第一号にする訳にはゆくまい」それに続いて「後世までも語り伝えられるであろう光栄ある最初の特攻隊長を、兵学校出以外の者にやらせたくない」

特攻とは飛行機の胴体に爆弾をくくりつけ、時には片道燃料で飛んで行き敵航空母艦に体当たりする飛行隊の事をいう。愛国の精神に燃え旺盛な敢闘精神を持った隊員は、数ある中から選ばれた喜びに溢れ、キラキラと眼を輝かせ莞爾かんじとした笑みを残して出撃し

た。

生と永遠に決別する死でしか任務を達成できない。特攻隊員たちの心情を思う時、いつも私は目頭が熱くなるのを禁じ得ない。

水野芳衛大尉（飛行第五十四戦隊所属、戦後航空自衛隊操縦教官）の述懐。

「勇躍志願した者も、志願せざるを得なかった人も、生きて帰ってくる事のできない特攻という行為に、皆苦しんだに違いありません。私は、出撃する大勢の特攻隊員を目にし、直援（直接援護）のため一緒に飛び立ちました。その日の彼らの顔が、晴れ晴れと明るかったのが忘れられません。そこまで死に自己を直面させる、そこまで己を持っていた彼らの気持ちを考えますと……」

自分の所属する集団の決定した目標に自己をすり合わせることによって、集団と結合できたという無限の満足感を持つようになる。そこには自己犠牲を含む一切の運命をゆだねても悔いしない、いわゆる集団我れを

形成するのである。

特幹の資格のまま飛行戦隊に転属した私は、身近に特攻隊員に触れる機会に恵まれた。彼らは出撃命令の下るのを待ついわゆる待機特攻隊員である。普通の若者であった。親しいで人間形成途中にある隊員は、特攻によって生と死のアポリアについて、無理やり結論を迫られるハメになった。早春の田圃道を歩くすずやかな瞳をもつ乙女を見て頬をぬらし、広島に新型爆弾が落ちたと聞いては、ふるさとの安否を心配する優しさがあった。「諸士は生きながらにして既に神である」と、壮途を送る司令官はこう言って激励した。

特攻は空中だけではなかった。海面を走る舟艇に爆雷を積み、時速二十ノットで敵艦に体当たりする水上特攻隊員の殆どが特別幹部候補生であった。

彼らは特幹志願票の志望兵科欄の船舶兵という上に○印を付けた。そして小豆島で訓練中に海上挺進戦隊という名の特攻隊に編入された。全長五、六メートルの耐水のベニア板製のボートに自動車用のエンジン

(六十馬力)をつけただけの兵器で特攻自爆とは!

彼らは比島と沖繩の海岸洞窟から出撃したが、後年の記録を見ても戦果らしいものは見当らない。飛行機の十分の一の速度で白波をけたてて敵艦に発見されずに攻撃することが果たして出来るのだろうか。

弱者の特攻と言われたこの戦隊で、第一期特幹生千九百二十人中、戦死者は千百三十八人にのぼった。実に六〇パーセント、未成年兵の戦死率としてはこれほどの例はほかにない。

航空通信学校、尾上教育隊出身の特幹一期生湯村泰伍長(のち特攻少尉)は、出撃する特別攻撃隊「誠七一飛行隊」を八魂飛行場で見送りしているとき、搭乗隊員の通信手が急な腹痛を起こした。咄嗟の身代わりを買って出た彼は、レシーバーを借りさっさと機内に入った。「トクカンイツキユムラタイ イマヨリトツニウ」の電文を送り沖繩洋上に散華した。彼はもともと対空無線隊員であったが、ことここに至って特幹生の気質がよく出ていて見事と思う。

私は水戸の教育隊から第五十一教育飛行団長隷下の飛行第百七戦隊第一中隊に配属され、昭和二十年四月兵長に進級した。

部隊は浜松市の北方台地にあたる古戦場跡の三方ヶ原飛行場にあつたので、水戸駅から東京の焼野原を通り、空襲の合間を縫いながら丸二日ばかりで着任したのであつた。

昭和十九年十月に新設された戦隊で、双発の新鋭爆撃機キ一六七飛竜を改造したキ一〇九で、最後尾の機関砲以外の火器を全部取り外して、機首に八八式七二ミリ高射砲を装備してB 29激撃機とし、乗員も九人から五人に減らして「飛竜改」と呼ばれていた。

因みに昭和十九年十月東京空襲の際、邀撃に出動したが、高空性能が不足のため有効射程に接近できず、成果はひとつも無かつたと言われている。

西に浜名湖を望む三方ヶ原飛行場は、陸軍爆撃隊発祥の地と言われ、陸軍航空の重要基地であつた。空襲も日に日に激しくなり、戦隊は人的物的損害を避けるため福井県三国飛行場を逃避先に利用したりしていた

が、我が第一中隊には新任務が与えられ、昭和二十年六月初旬に南朝鮮大邱飛行場に移駐し、朝鮮海峡の哨戒と船団護衛に当たることになった。

七月を迎え夏の太陽はギラギラと輝き、滑走路からは陽炎がゆらめく某日、济州島方面の哨戒の任に当たった第一中隊和田機は、不運にも木浦沖上空で敵米軍PB4Y哨戒爆撃機と遭遇、機銃六基の敵機に叶うはずも無く「モノポオキ コウセンチュウ コウセンチュウ」のヒラ打ち電文を発し消息を断つてしまった。

この戦隊に転属して以来、無二の戦友となった半島出身の野村伍長が通信士として搭乗していたが、電鍵を握り「自爆」の約束であるツー音を発したまま海中に没してしまうのか、私は無意識のなかで基地無線室の電鍵をとって呼びかけた「電文送れ サラ、サラ、サラ（更に送れ）。しかし何の反応もなく、キー〇九和田機は機長以下五人とともに未帰還機になってしまったのであった。

八月上旬、中隊は再び作命によって平壤飛行場に移

動した。そして数日後アッ！と驚く事実が発生した。日ソ不可侵条約を破って、ソ連軍が満州・朝鮮の国境を越えて侵攻して来たのである。精強を誇った関東軍も、そして朝鮮軍も弱体化していて、ソ連軍は破竹の勢いで進撃中であるという。平松中隊長以下隊員一同に緊張が走った。平壤飛行場から離陸していく戦闘機を見送りながら、我々の中隊にも何れ出撃命令が出されることであろう。

切迫した状況がひしひしと伝わり、さまざまな情報が間断なく乱れ飛んでいるようだ。我が隊が出撃するとなればソ連軍の軍事施設が集結地であろうから、ウラジオカハバロフスクあたりと推測できる。保有機は五機であったが、現在の可動機は三機である。しかしその日は何事もなく日が暮れて待機終了、解散した。そして一週間、今日出るか、明日出るかと、出撃命令の出ないまま八月十五日を迎え、終戦の大詔が発せられた。玉音放送は途切れ途切れで聞き取れなかったが、敗戦と分かり名状し難い混乱の渦となり部隊は重苦しい雰囲気包まれた。その夜宿舎にしている平壤

師範学校の塀の外は朝鮮人の過激分子によって取り囲まれた。宿舍の雑役として働いている朝鮮人雇員の顔つきが変わってきている。平壤市内で不穏の動きが報告された。

我々は拳銃に実弾を込め、軽機関銃を運び込んだ。窓から見ると、ところどころに人がかたまつて塀の中を窺っている様子である。重く腰に下げた拳銃を握り締めながら、塀に添って巡回を繰り返し、何とか無事に夜明けを迎えたのであった。

翌十六日、寝不足の眼をこすりながら書類焼却が始まった。大事な乱数表（暗号書）を点検しながら火中に放り込む。めらめらと燃える炎を見ながら、戦争は終わった。帝国軍人として、下士官の卵として、死におくれたうしろめたさ、鍛えられた軍人魂も特幹魂も、何もかも発揮する場を失ってしまった。異境の地で、これからどうすればいいのか、と思った。

昼頃、「朝鮮に住居、身寄りのある者で希望する者は除隊を許可する。また半島出身者は直ちに装具を返納して帰郷準備すべし」と中隊本部から示達があつて

中隊中がざわめいた。私は朝鮮に身寄りがあつた。京城（現ソウル）に兄一家が教師をしており、また祖母の妹にあたる親類も京城近くに住んでいる。希望すれば直ぐに除隊できる。しかし私はなぜか除隊したくなかつた。理由はわからないが、とにかく中隊と共に行動したかったので、平松隊長に直訴して許可を得た。ただし「出撃するかもしれんぞ」「はい！」の条件付きであつた。

翌八月十七日、我が戦隊は派遣中隊であつたため、原隊復帰の命令が出て原隊の基地である群馬県新田飛行場へ帰還することになった。

第一中隊平松隊は可動三機の重い高射砲をそれぞれ取り外し、身軽になつたキー一〇九に隊長以下六十余人が分乗、夕刻五時三十分、平壤飛行場を離陸し、空路二キロ、海軍の小松基地を目指して飛翔、翌十八日無事新田飛行場に着陸、帰国できたのである。

北朝鮮の平壤飛行場で終戦を迎えながら捕虜になることも無く帰国し復員できたことは、平松隊長の勇断

と機微の計いによるものであることはもちろんであるが、私自身を顧みて純粹な特幹魂を信念にして戦隊と運命を共にすると潔く申し出た所以の賜物と確信している。